

福島県飯館村の仮設住宅の皆さんに

までいな手仕事、習いにいこう

福島市松川町第一仮設住宅集会所 2012年12月25日10時〜16時

かたびっこなのは「愛嬌」



福島県飯館村は阿武隈高地にあり人口約6000人が住む自然に囲まれた村です。東日本大震災後、福島第一原子力発電所の事故による放射線の影響により、計画的避難区域になりました。住民のほとんどが避難生活を余儀なくされています。

福島市に建てられた仮設住宅を訪問し、そこで暮らす方々に生きる知恵と生きる背中を教えてもらいにいきました。それがまでいな手仕事。までいとは真手(まて)という古語が語源で両手を意味します。それが転じて、手間暇惜みず丁寧に心をこめてつつましく、という意味で東北地方で使われる方言です。

今は、一時避難から長期的な新生活への変化のときであり、日常再建の模索のときでもあります。自然と共にある農村の暮らしに息づくテマヒマの心と技。伝統に受け継がれてきた手仕事への誇り。それを再認識するところから、復興が始まるのかもしれない。長年培った経験が目覚めるとき、私達も一緒に大切なものに気づこう。そんな想いで小さな駅に降り立ち、北風にゆれる正月飾りを目にしました。



手慣れた手つきの中に熟練のコツ

今回のプログラムは、古い着物を利用した布ワラジ作り。子どもの頃から囲炉裏端で作ったという話などを聞きながら、編み方を教えていただきます。あまりに手際のはやさに簡単そうに見えますが、なかなか同じようにはいきません。

ワラジを編みながら要所所で、「そこをまでにするのがポイントなんだ」「までにすれば丈夫になっから」などの声が行きかかっていました。やりかたはわかっている、までい(丁寧に真心込める所作)にしなければ、使えるものは出来上がらないのです。

「までにしらい」東北で生まれ育った私が、ばあちゃんによく言われた言葉でした。意味は「もっと丁寧に大切にしないさい」文字にすると空々しくなってしまうのですが、まで(まで・までい)には、ばあちゃんが孫に教え伝える、優しさや愛情が凝縮しています。別れぎわには、「までにね」があいさつ。「無理しないであなたらしさと身体を大切にね」という投げかけです。

長く使えるモノになるには、どうやら見た目の立派さだけでなく、込める何かが必要で、それはなんだか温かくせつないものだと、布ワラジを編みながら、みんなが感じていきました。

ベテランの皆さんはめ上手教え上手





「まさかこの歳で、こんな暮らしするとは思わなかった。何もすることないんだよ。生きてたってしょうがないよね。」その言葉に亡くなった父を思い出しました。「病気よりも金がないのよりも辛いのは、なにもやることがないことだ。可哀そうだ気の毒だと声をかけられることが一番嫌なことだ。」そう言っていた父の姿が津波の跡地と一緒によみがえります。

人生経験の未熟な私達にとって、教えてもらいたいことは沢山あるはず。何を教えてもらえばいいかすら分からないほど無知だけれども、手のひらで転がすだけで紐になっていく布の端切れをみて、なんだかすごいと思うのが実感でした。

もっと一緒になにかしたい。一緒にご飯を食べたい。経験的に繋がれてきたらう伝統にふれたい。実際やってみて大変さがわかった。参加者は電車のすくないプラットホームでだるまストーブで暖を取りながら、感想を述べ合いました。

記:こなら楽舎 本間

この仮設住宅の中では、着物をリメイクして気軽に着られる半纏や作務衣が作られていました。いいだてカーネーションの会のお母さん達の手仕事で、着られなくなった着物に命が灯ります。全国から集まった支援の着物たち。昔の着物の精鍛な染め、木綿糸の丈夫な手縫い。「日本中から送ってくれたんだよ。ありがたく大事にしないとね。」そのおすそ分けをいただき、布ワラジは編まれていきます。

「子供に教えるときは、片づけまでちゃんとさせるんだ。はやいうちに(子供の年齢が小さいうち)教えれば、大人になって恥ずかしい思いすることないから。」「嫁にいったらおほとけさん(仏壇)を大事にすれば、ご先祖さんがいいように(うまくいくように)してくれんだ。」「ワラジを編みながら、教えてもらいました。

「農業ができれば、こんないい仕事はないよ。」「なんでもこさえる(つくる)んだからね。道具もわらぐつも。材料は山から採ってくるんだよ。」日本の自然が活かされてきたのも、暮らしの知恵があったからで、その知恵が自然を持続循環させてきたのです。



帰り道は雪でした。  
また、教えてけさいね。  
(おしえてください)

